

中国社会学に関する一考察

——その導入と形成をめぐって (一)——

鍾 清 漢

はじめに

社会学という名称の社会科学が中国に伝えられたその背景には、どうしても中国の社会的・政治経済的状況が密接に関わっていることを念頭におかなくてはならない。1840年、アヘン戦争における清朝の敗戦によって、イギリスをはじめとする帝国主義の中国侵略は、満清帝国の腐敗の極致を暴露したものである。1842年の南京条約に続いて、1851年の第2次アヘン戦争以後、帝国主義列強は気狂いじみた領土の要求や賠償を^{ほしま}恣にした。

こうして清朝中葉以後、中国は内憂外患のただ中であって、政治と経済の状況は一步一步深刻な変化をみせていた。残酷で腐敗した封建的統治と重々しくのしかかる封建剝奪は、封建生産に関係のある腐敗と、上部構造の疑惑の暴露によって、日に日に社会生産力の前進の妨げとなってきたのである。全国の人民は日の上ることのない真っ暗闇の悲惨な生活をしているのに、支配階級は気狂いじみた土地の略奪ばかりか、増税により税の負担を人民に強要することに躍起になっていた。当時、「三年間清政府の官職につけば、十万両の雪花の銀」という不満の声が盛んにきかれた。この生き地獄のような生活の中で、帝国主義諸国の商品がさらに大量に流入する状態は激化し、中国の小農業と家庭工業の結合した自然経済を破壊して、全国各地の農民による反帝国主義・反封建主義の闘争を引き起こしたのである。洪秀全を首とする客家出身の漢民族は、太平天国の革命を起こし、清朝を脅かした。さらに義和団運動等の民衆の怒りは、これらの闘争の中でも最もはっきりと表れたものであった。

1840年、英国のブルジョア帝国主義が中国を侵略するアヘン戦争を起こしたことによって、中国の社会発展には、一筋のはっきりした境界線が引かれ、それは封建的な中国を、半植民地・半封建的中国へと変化させるターニングポイントとなった。すなわち、アヘン戦争以前、中国は西周より三千年も続く独立した封建国家であった。中国社会はもともと独立の過程と自給自足の生産体制を持っており、中国政府は“天朝”をもって自ら任じた。いわゆる“天朝”

(朝廷)は物産が豊富で、中国は広大である故、ないものはないと言ってよい程、豊かな国であった。つまり本来、外国の物資に頼らなくとも、自給自足できる国家なのである。中国の支配階級、地主階級からみると、ブルジョアジーの生産方式と資本主義のいわゆる文明なるものは、有害であるばかりか、全くはっきりしない未知のものだった。従って彼らの対外政策は、基本的には門戸が閉鎖的である。しかし、西方の資本主義勢力が、まさに潮水の湧き立つごとく、東方に向けて猛進してきたとき、中国は絶え間ないショックを受けた。そして、それは中国人をして勇ましく卓越した、しかも連綿としてやむことなき闘争を引き起こさせることになったのである。太平天国や義和団等の革命闘争を首とした農民革命は、これらの闘争の基本的な力であるが、たくさんの地主ブルジョアジーの革命派と改良派の闘争も、極めて重要な位置を占めていた。こうした中国上部の人士は、外には帝国主義の侵略、内には封建支配階級の圧迫を受け、国は弱く、民は貧しく、最もひどい状況になると、強い愛国心が自ら奮起した。彼らの中の幾人かの思想的に開化した人士や進歩的な人物は、中国が結局のところ、どこに向かって行くのかということに対し、広く思索と探求をなし、このために奮闘し、また犠牲となったのである。当時の歴史条件と彼ら各々の階級の局限性が存在するため、中国の先行きの正しい道を見出し得た人はおらず、同時にこれらの人々の状況把握もさまざまだった。しかし、彼らの中の多くは、当時それぞれの立場からあらん限りの努力を行い、後世の人をして惜しめない感激を起こさせるに値するものである。やがて日清戦争で中国海軍が全滅したことにより、民族の危亡に臨んで、全国民が目覚め、洋務派が起こった。ここにおいて、君主立憲制を唱える康有為や梁啓超、そして嚴復等による、西洋の学と変法をもって中国を救おうとする動きも起こったのである。しかし、また中国の封建帝制を打倒しないことには、中国は救えないという革命派が現れた。その代表的指導者が孫文である。彼は建国方略の心理建設においては、国民の考え方からの変革を求めたのである。

本稿で述べる清末から起こった西学、とりわけ社会学の変容とその形成は、どちらかと言えば上の方が懸命になっていたが、日本の状況はどうだろうか。尾形裕康博士は「西洋教育移入の方途」の序説で、「明治の大改革も、西洋の制度に範をとり、先ず模倣文化の上に成り立った直訳的な制度であった。一切の旧秩序を一洗して、新体制の樹立を強力に押し進めた画期的な文化革命である。大化の改新が上層階級だけに限られていたのに対し、明治維新は、上下男女の別なく国を挙げて、文化革命の渦中に巻きこんだ点が異なっている。」(注1)と述べているが、これは実は両国の西学受容の違いでもある。

—

中国社会学の起こり、発展の歴史を研究することは、その発展のプロセスをたどりながら、有益な栄養を吸収し、その教訓をもとに、正しく中国の特色ある社会学を理解することになる。

ところで、中国における社会学の発展とその役割については、上述の時代的要請の他に、少なくとも以下のことが記される。いかなる科学、またとりわけ社会学という科学は、いかなる国においても、その国の社会構造のわく組と社会の価値観及び態度によって影響されよう。同時にその存在と伝授は、その国の社会文化に対して、それなりの作用がある。これは中国においても例外ではない。

中国の文化伝統または民族心理の特徴を挙げれば、およそ次のようになる。1つは社会関係を重んじること、2つ目は実用を重んじること、3つ目は中庸を重んじることである。この3つの社会的価値志向は、それが変化する、しないにかかわらず、社会学の発展に対しては、やはりそれなりに有利に、もしくはその反対に働くものである。

中国社会における社会学で、特に重要と思われる点は、下記の4つにまとめることができよう。

- 1) 中国は悠久なる歴史がある。中国社会には実に多くの題材となるものがあり、その発掘が期待されている。これは社会学者がその研究の責務を負っているのである。
- 2) 中国の国土は広く、天災もあれば人事の患いもある。従って社会問題がとりわけ多く、これらは社会学的観点に立って、社会学の方法で解決されなければならない。
- 3) 中国の進歩を促進することにおいて研究することはもとより、さらに実地に立って改革しなければならないことが多い。これは社会学をもって補い導くべきである。
- 4) 目下、中国には、大陸中国、香港地域、台湾といったそれぞれ異なる政治、経済、教育、社会…等の諸制度がある。従って社会学の研究発展も、これまでのカント、スペンサー、マルクス、マックス・ウェーバー、デュルケム等の早期の社会制度とは違っている。

これらの異なった社会関係を重んじるということは、社会学の研究対象から言えば、かなり合致していると言えよう。また、実用を重んじることから観察すれば、これは応用社会学においてはかなり利するところがあるが、純正社会学の発展には不利な点もある。さらに中庸を重んじることでは、社会学が極端に走らず、派別間の争いが少なくなる。(注2)

一般に、中国の社会学は燕京大学の「文学報」の掲載から取り沙汰されているが、しかし、于光遠氏は、すでに毛沢東には1926年の「中国社会学各階級の分析」、1927年の「湖南農民運

動考察報告」という2つの論文があったことを指摘している。(注3)しかし孫本文は1948年、中国社会学史に関する「当代中国社会学」を著し、この中で彼は、唯物論史観の著作は純粹なる社会学ではないと述べた。(注4)これに対して、許仕廉(燕京大学社会学科主任)は、中国社会学は中国古代社会をも研究すべきであると主張し、唯心論の社会史学者の陶希聖をも燕京大学の社会学科の教授にした。(注5)このことは社会史の研究が社会学の隣接学問であるためと考えられる。

なお後述で見られるように、嚴復は社会学を移植する理由の1つとして、それには中国固有の思想、とりわけ孔子を代表とする儒家思想と互いに融合するところがあることを挙げている。周知のように、中国は孔子以来、極めて多くの精神文化を遺して来たが、その中で社会思想が最も大きな文化遺産であった。そして、社会学はそれ自体、中国文化の強調するところとかなりの共通部分があった。社会学の大師とも言うべきソローキン(A. Sorokin)は、その名著「当代社会学説」の中で、孔子の思想は応用社会学または社会学を言及することとも関連があると言う。また唯社会学派(the Sociologistic School)からも孔子はその先駆者と言ってよい。中国人は、この偉大な贈り物をそのまま保存して来た。言わば思想から思想へと発展しただけであった。ただ、この思想的発展はほとんど科学化することなく、いつまでも哲学の範疇(category)の中においてしまったのである。しかるに現代は自然科学に遅れを取りながらも、懸命に追いつこうとする社会科学の時代である。コント(A. Comte)がサン・シモン(Saint Simon)の哲学を科学化したのと同じように、中国は、これまでの社会思想を社会科学(社会学)に発展する時代が来た。呉主恵は「中国社会学序説」の論文で「中国の思想や哲学に関心をもつ社会学者は、それを中国社会学に発展させる責務を負っている。つまり中国の社会思想を社会学方法論(Sociological Methodology)に基づいて分析し総合する必要を感ずることである。それはWhy, What, How, Wholeの問いに対して科学的に答えるべきであるが、このことは、認識論、対象論、方法論及び体系論のそれぞれの範疇において明らかにすることは、言うまでもない。同時にその背後にあるSeinと,Sollenの関係概念を方法論的に解明する必要に迫られている。」と指摘する。(注6)従って中国社会学を論ずるに当たっては、中国の人間、社会、文化に関する概念の成立を取り上げてみる必要があると思われるのである。

但し、中国において社会学を発展させる上で重要なことは、理論の研究だけでなく、応用の面でも注意を怠ってはならないということである。社会学の発展の過程で、その歴史をたどると、ヨーロッパの伝統は、理論の研究を比較的重視するが、社会学が米国・日本に伝わってからは、応用社会学が普遍化されて来たと言えよう。中国社会学の草創期においては、理論の面では、ほとんどが西洋の理論や学派の紹介に主力を置いていた。これら社会学の先輩学者は、

社会調査の面でもかなりの業績があった。これは当時の時代背景や条件の下では、それなりの影響があり、貢献したものと言える。しかし、時代の変遷や各国の政治、経済、社会、教育の諸制度においては、それぞれ違ったものがあり、とりわけ中国の社会制度は、大陸中国と台湾で各々異なっていることも事実である。社会学の研究も当然、理論と応用の両面に力を注がなくてはならない。上述で中国社会における社会学の特殊性についてふれてみたが、カント以来、家族が常に社会学の重要な研究対象であることは、周知の事実となっている。この家族は中国社会文化の中でも最も基本とする社会組織の単位である。また、近代社会学者の多くは、人間関係の研究を重視しているが、中国の正統的な社会思想も、ほとんどと言ってよいほど、この人間と人間の相互の関係の思考にずっと集中してきた。ただそれをより体系的、実際に研究することがなされていなかったのである。近代の孫文の思想は、古今東西の思想を集めて完成されたものであり、中国の正統思想を代表しているのみならず、西洋思想の精華をも集めている。それは現代社会学の思想にも組み入れられ、さらにそれを超えているところすらみられるのである。(注7)

中国の道統としての人文主義は、人類の整合と有機の哲理である。それは「神の意志」とは離れないが、また物質世界とも隔てることがなかった。孔子は真・善・美を一種の有機的で諧和的な統一とみなしている。例えば子曰く「意なく、必なく、固なく、我なし。」「その以^なす所を視、その由る所を觀、その安んずる所を察すれば、人焉んぞ瘦さんや。」「衆これを悪むも必ず察し、衆これを好むも必ず察す。」これらの主張は近代科学者が強調しているものではないのか。ただ後世の人がこれを発展させず、実行しなかったにほかならない。また当代のヒューマニズム社会学者の強調するところでもあり、つまり中国に欠けているのは、当然科学方法と技術なのである。

二

ところで、中国における社会学の導入とその形成を語るには、どうしてもその発展の過程を叙述しなければならない。それにはいくつかの段階的な分け方が挙げられよう。

まず比較的早い時期には、李劍華が1929年に書いた「社会学史綱」がある。彼は「科学の社会学」は西洋のものであり、それは1903年に中国に輸入されたと言い、1919年の五四運動を重要な時期としている。(注8)次に、蔡毓驄が1931年4月に「社会学刊」第5巻第3号で、「中国社会学には4つの時期があり、すなわち、(1)輸入期(1897-1917年)、(2)移植期(1918-1925年)、(3)萌芽期(1926-1930年)、(4)建設期(1931年-)である」と区分した。第3の分け方は、

楊堃が1942年に書いた「社会学大綱」の中で、萌芽期（1840-1918年）、開始時期（1919-1930年）、建設時期（1931-1942年）としている。（注9）第4の分け方は、孫本文の「当代中国社会学」において、萌芽期（1903-1911年）、発展期（1912-1928年）、比較発達期（1929-1948年）としている。第5の分け方は、黄紹倫の「現代中国社会学と社会主義」において、受け入れ期・訳著（1897-1910年）、幼年期・アメリカ社会学（1910-1930年）、成年期・中国化（1930-1949年）としている。このようにそれぞれの分け方は違っているが、これらの分け方から、嚴復がスペンサーの「群学肆言」を訳した1903年を中国社会学の始まりとみるのが比較的妥当ではないかと思われる。

中国における社会学の発展のプロセスをたどると、おおよそ上述のように、いろいろな学者の主張や分け方があるが、ここでは韓明漢の「中国社会学史」を参考に、次の5つの段階に分けてみたい。すなわち、① 胎期（1891-1910年）、② 萌芽期（1911-1918年）、③ 幼芽期（1919-1927年）、④ 成長期（1928-1948年）、⑤ 改革期（1949年-現在）である。（注10）なお、本稿は第4段階の成長期までの考察である。

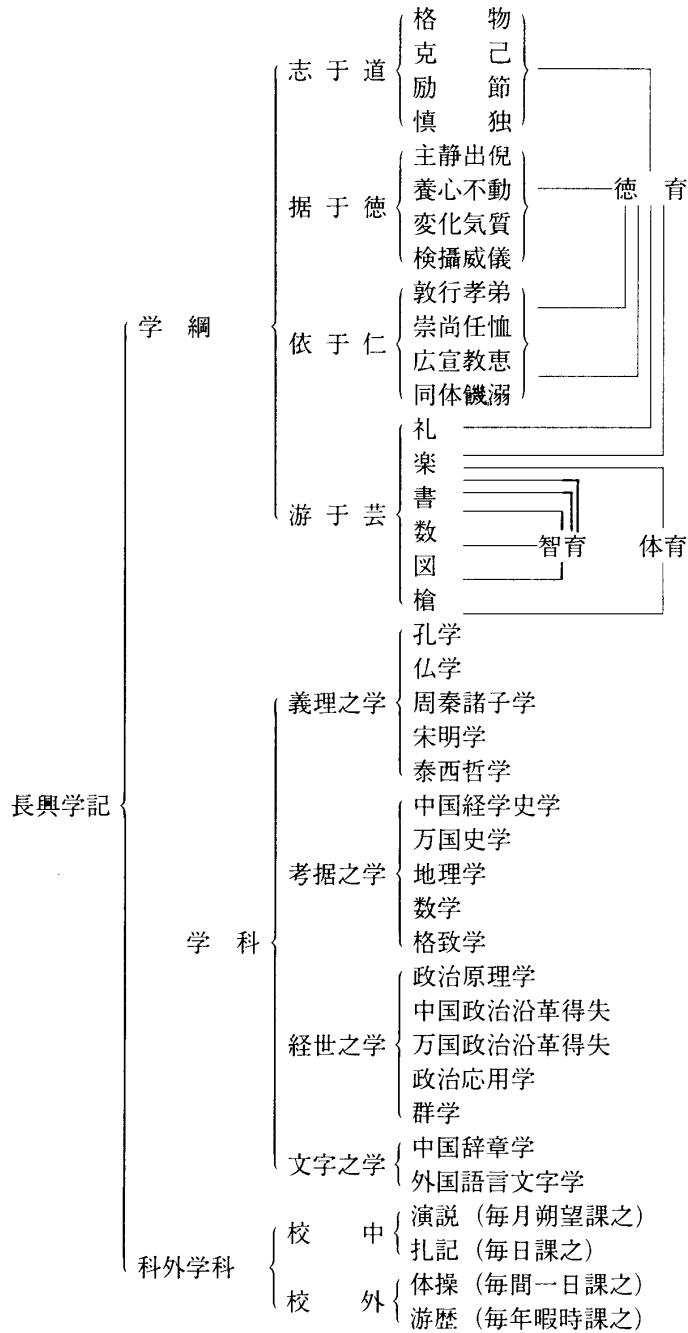
三

社会学は西洋から直接に、または間接的に中国に伝えられてきた。「社会学」という漢字の名詞も、実は日本語訳を取ってそのまま用いてきたものであることは、ほぼ間違いのないと思われる。齊藤正二氏の「日本社会学成立史の研究」では、「明治11年頃、東京大学で社会学が行われて（社会学という術語も生まれた）、社会学は発展しつづけることができた……。」（注11）と述べている。

「社会学」という名称が現れる以前には、中国では「群学」という言葉が使われていた。光緒17年（1891年）頃、康有為は広州長興里万木草堂（長興学舎）で講義した時、すでに「群学」というカリキュラムが組まれており、それは人を治める学問のことである。また政治学原理と共に、経世の学として列している。ここで言う群学とは、すなわち社会学であろう。なぜならば、漢字の「群」とは、つまり社会を指して言うものだからである。なお、康有為が長興学舎で行った講義の内容は、次頁の図に示される通りである。

維新運動の前後において、このような学校はすでに20校もあった（1897年）。その代表的なものは、譚嗣同・唐才常・梁啓超等による湖南長沙の時務学堂や、嚴復等による北京の通芸学堂である。彼らも均しく群学という名称を用い、その後、京師法政学堂、上海南洋合学、天津頭二等学堂、及び上海のセントジョンス大学等は、すべて社会学の名称を使うようになった。

中国社会学に関する一考察



資料：梁啓超著「康有為傳」上海広智書局，1908年

書物では、まず1896年に譚嗣同が「仁学」という著書を出している。1902年の梁啓超の論著の中には、しばしば「群」という言葉が用いられ、彼はその師康有為の説にある「群」をわかり易く解釈するために力を入れたが、それは嚴復の訳した「天演論」および譚嗣同の「仁学」

に啓発されてのことであった。彼は「社会」を「人群」と訳し、それゆえ、「社会学」と「群学」はこの時期では併用されているものと受け取られよう。

ある人はよく中国における梁啓超や嚴復は、あたかも日本における田口卯吉が日本近代思想史に大きな役割を果たしたのと同様に、中国の近代思想史上、きわめて大きな役割を果たしていると言う。とりわけ彼は「変法通議」の中でも、科挙制度を変じて、学校制度を以てこれに代え、欧米の書籍を翻訳して新しい思想を取り入れることに努めたのである。

ところで、「社会学」という名称が初めて書物に現れたのは、岸本能武太著・章炳麟訳の「社会学」（1902年）であった。当時、社会学関係の書物が盛んに翻訳され、例えば、1903年には、嚴復がスペンサーの「社会学研究」を「群学肆言」という書名で訳したほか、馬君武がスペンサーの「社会学原理」第2篇「社会学引論」を、呉建常がギデングス（F. H. Guidings）の「社会学提要」を訳している。後に、欧陽鈞も「社会学」を編集・翻訳した（1911年）。このように、中国の社会学の導入の初期においては、ほとんどが訳書に頼るほかはなかったと言ってよい。

いずれにせよ、社会学が初めて中国に導入された動機は、西欧の侵略によって中国の知識人が目覚め、国を救うには「以夷制夷」（外国の方法を学んで、外国に対処すること）しなければならないと認識したことである。先に述べたように、中国社会はアヘン戦争後、大変激しい民族の危機的階級闘争が起こった。愛国思想を持つ維新派は、国を救うことは真実を追求すべきことにほかならないと考えた。そして、西洋の科学の学習と人材の養成の過程において、社会学を中国に移植したのである。つまり社会学の中国への導入と形成は、上記の2つが主眼であった。それと言うのも、社会学は中国社会の改善と革新人材の養成の上で、その「漸進論」が中国固有の社会学説と一脈相通じるころがあったからである。その両者の融合は、まさに彼ら維新改良派にとってきわめて重要な理論根拠でもあった。それはまた長期にわたって、中国の社会学界に影響しつづけてきたことは言うまでもない。

四

社会学が中国に移植された背景には、1840年のアヘン戦争後、一連の国辱から、曾国藩、李鴻章等の洋務運動の失敗、康・梁の変法維新運動の挫折などとも深いかわりがある。ここに及んで、中国の官僚・知識人層は、自国の政治・経済・社会・文化のあらゆる面に深刻な批判のメスを入れるとともに、欧米の文化に対してもより深い研究をするに至った。このことは、中国の経済社会構造に漸く近代化の変革がもたらされ始めたということとも表裏をなすもので

ある。

これより少し前の段階では、康有為が「大同の書」の中で、「大同の世」という未来社会を構築している。すなわち、大同の世とは、天下を公とし、階級がなく、家庭を廃除し、独立自主の個人の志により結合した社会である。彼は個人を社会構成の単位及び基礎とする資本主義理論こそ、家族を単位及び基礎とする封建主義に取って替わるものとした。

梁啓超は康有為の理論をさらに発展させ、「群を以て体と為し、変を以て用と為す」という天下を治める道を説いた。ここで言うところの「群」とは、すなわち人群、社会のことである。彼は群の目的は「保国保種」であり、黄種人と連合し、君民同治し、孔子の教えを以て国教とし、専制独裁に反対し、外国の侵略及び買辦洋務派に反対することとした。また、変の目的は政体を変えることであり、その方法は科挙を廃し、学校を設け、官制を改め、地方自治を実行することであった。このように彼は社会の存在と社会変革に対して、高度な理論で概括した。そして「群」はすなわち天下の公理であり、万物の公理であると共に、変もまた古今の公理であり、およそ天地に存在するものはどれも変化しないことがないと述べた。言うならば、彼が「群学」はすなわち「社会学」であり、天人の間の根本学であるとみなしていることは、明らかであろう。彼は自然科学、哲学と社会学を1つに結びつけているが、しかしその文章の中では、かなり多く「社会学」と「人群学」を取り上げている。また「進化論革命頡德之学説」という一文において、「人群学」を史学、政治学、生計学、宗教学、倫理学等と並列し、さらに「社会学」の下にも「人群学」と注を付けた。このことから、彼の言う人群学が社会学を指していることがわかる。梁啓超が西洋の社会学の研究を非常に重視したのは、この社会学なるものが社会改革に必要とされ、中国に移植されるべきものであったからにはかならない。

維新派・急進派の譚嗣同の社会思想も、明らかに西洋の社会学説が吸収されており、その著「仁学」第1編の「仁学界説」は「社会学」について触れている。(注12)しかしながら、西洋思想の最初の組織的紹介者と言えるのは、やはり嚴復をおいてはいないであろう。嚴復は中国における最初のイギリス留学生の1人であったが、帰国後、イギリス近代の社会・政治思想の翻訳に努め、中国における組織的西洋思想の端緒を開いたことは、大いに評価されてよい。嚴復が紹介したのは、ハックスレー、アダム・スミス、スペンサー、ミル、モンテスキュー等諸氏の経済、法律、社会、倫理、進化論等に関するものであり、彼によってこれら西洋思想の翻訳は、当時の思想界にきわめて大きな影響を与えたと言われている。とりわけ、ハックスレーの進化と倫理の思想的影響は、最も強いものである。

先に述べた曾国藩、李鴻章等の洋務運動は、一方において西洋の科学技術の移植を切実に要求したにもかかわらず、思想的には伝統思想を固守して、近代思想の移植をかたく拒んだ。

また、康有為、梁啓超等の変法維新運動も、やはり伝統思想の立場をあくまで固守しようとするものであった。しかし、嚴復をはじめとする、清末における西洋思想の移植は、こうした背景を基盤として、そこに大きな転換と飛躍をもたらしたことも、指摘されなければならない。

ここで嚴復の訳書とその社会思想についてふれてみよう。

嚴復（1853-1921年）は、福建省閩侯県に生まれた。彼は中国近代史上、積極的に西洋の学問を移植した代表人物の一人であり、また社会学を移植した先駆者でもある。

嚴復は1866年に洋務派の建てた福州船政学堂の入試に合格し、そこで自然科学の知識を学んだ。これは、彼がその後、西洋の政治・社会関係の論著を翻訳した際、その多くが自然界との対比による研究であったことの基礎的学問の修得につながっている。やがて彼は、1877年、政府が241人の留学生を英・仏に派遣して軍事知識を学ばせた時のメンバーにも選ばれた。彼は留学期間中、とりわけ西洋の資本主義社会制度と社会政治学説に注目し、東西文化の異同を比較したが、このことから彼はダーウィンとスペンサーの思想の影響を大きく受けていることがわかる。1879年に帰国後、1880年から1900年まで、北洋水師学堂で教務長及び校長を務め、後には維新変法の必要について多くの論文を発表した。また、1898年に嚴復が翻訳・出版したハックスレーの「天演論」は、中国社会に大きな影響をもたらした。続いて彼は、スペンサーの「群学肆言」（1903年）、ジョン・ミルの「群己権界論」（1903年）、ジェンクスの「社会通詮」（1904年）、モンテスキューの「法意」（1904-1909年）、ジョン・ミルの「名学」（1905年）、ジェヴォンズの「名学浅説」（1909年）等、次々に西洋の政治社会学説を紹介している。

嚴復はその訳著の中で、自らの社会思想をも表明し、世界における社会方式は3種類に分かれると言う。すなわち、トーテム社会、宗法社会、軍国社会である。そして進化の速度の違い、発展の段階の違いから、中国と西洋の社会の組織、根本思想、法制、政治原理等の方式も異なっている。中国は宗法社会であり、家族主義を中心とするが、西洋は軍国社会であり、個人主義を中心とする。嚴復によると、中国と西洋の社会方式の違いは、次の3つに規定される。その1は、天時、地利、人為の違いである。その2は、政教付着の違いであり、すなわち宗法社会においては、政・教の二権が付着密接で、宗教神権に力があり、社会の進化を妨げる。中国の孔教もそのように宗法と君主の権力を守り、社会の進化を阻んだのである。しかし、ヨーロッパの軍国社会は、政治と宗教の癒着が必ずしも密接ではなかった。また、その3は、社会進化の観念の違いである。

さらに彼は、「中国人は古を大切にすが、現今のことを疎忽にしている。西洋人は現在のことにつとめ、古の時代に勝っている。中国人は一治一乱、一盛一衰にして、天の自然に随って物事を処理するが、西洋人は日に日に進歩を追求し、打ち勝って衰えることなく、またひと

たび治めれば、それを乱すことを許さない。」と言い、学術の科学研究はこうした西洋人の態度に学ぶべきであるとしている。(注13)

中国社会の根本思想が宗族主義をその出発点とし、三綱五常を重んじ、孝を以て天下を治めることと、西洋の自由・平等の個人主義思想との違いは、きわめてはっきりしている。嚴復は自由民主の社会を基礎とする思想を以て、中国古来の封建君主専制に対する攻撃を展開し、中国はそのために変法維新しなければならないと力説した。このような一連の西洋に学ぶ活動の中でも、彼が社会学を導入したことは特筆すべきであろう。

嚴復はハックスレーの「天演論」、スペンサーの「群学肄言」、アダム・スミスの「国富論」等の論著で、体系的にダーウィンの進化論を紹介した。彼は古を好んで現在を無視する形而上学思想に反対し、当時の中国社会と思想界の情況に基づいて、次の3点を強調している。第1点は、宇宙は進化発展するものであり、社会もまた進化発展するということである。彼は物々を競うのは、自らの生存のためであり、天澤とはその宜しきものを存するがためであると言った。第2点は、人類社会の発展過程においては、「優勝劣敗、適者生存」であるということである。彼はとりわけ「天演」をとりあげて、いかなる事物もこの普遍的な客観規律を免れることは出来ないとした。これは“struggle for life”，すなわち生物競争のことを意味する。第3点は、デモクラシーとフリーダムは社会進化の競争に適應する主な内容だということである。彼は西洋文化は創造的であり、発展的であると指摘した。

嚴復が社会学を導入した手順は、社会進化論と西方的科学方法論の導入のために、社会学の専門書の翻訳から始めた。「群書肄言」の序文で、嚴復は群学の研究は治乱や盛衰の道理を明らかにすることであると指摘し、さらに群学は中国固有の儒家思想の大学や中庸と相通ずるところがあり、社会学は中国の土壤に移植できると言う。嚴復こそ西洋社会学を中国に導入した第一人者と言ってよい。

五

中国社会学の伝統については福武直が次のように指摘している。「中国の社会学は、1903年、嚴復によるスペンサーの訳書『群学肄言』に始まり、1903年代には多くの社会学者によって理論的な著作や調査報告書が刊行され、中国社会学社の『社会学刊』や燕京大学社会学系の『社会学界』などの専門雑誌も出版されるまでになっていた。」(注14)しかし、中国にはアカデミズムにおける社会学とは別に、もう1つの社会学的伝統が築かれていた。すなわち、毛沢東の社会調査活動の伝統であり、それは戦後日本における社会調査の展開にも多かれ少なかれ影響

を与えている。

今日、世界における社会学は、カントの伝統社会学とマルクス社会学の二大陣営に大別することができる。それはあたかも政治上、民主自由主義と共産主義の二大陣営に分けられるが如きである。1949年以前の中国では、カントの伝統社会学が主流であったが、大陸での中共政権成立後は、マルクス社会学がその主流を占めた。本稿はカント社会学の伝統に基づく、中国における社会学の導入と形成の研究であるが、しかし、それは決して大陸中国におけるマルクス社会学を無視するものではない。

ただ、ここで一言付け加えておくと、1949年以前、社会主義を標榜する社会学は発展せず、カント社会学のアカデミズム一派と国民政府当局から監視され、異端視されてきた。つまりブルジョワジー社会学とも言われる西政社会学のいわゆる「純正なる社会学」派は、社会主義を標榜する社会学派に対し、大学教育でのカリキュラムの開設も許可せず、また新聞・雑誌や書店における著作発表も認めないという状態にあったのである。申すまでもなく社会学は人間社会に起こったあらゆる現象を研究対象としている以上、体制の如何を問わず、その調査研究活動や成果を無視することは出来ないと呉澤中国社会学会副会長は力説する。

六

次に、社会学教育の実践状況について考察してみることにする。

中国で最も早く社会学を取り入れたのは、京師法政学堂である。同校は1906年（光緒32年）12月20日の「奏定京師法政学堂章程」の中で、社会学2時間を設けている。（注15）

上海のセントジョンズ大学は、1908年に社会学課程が設けられ、アメリカのモン氏（Arthur Monn）がこの授業を担当した。

つづいて中国で最も古い大学である京師大学堂（1898年、光緒24年創立）は、1911年の「改正法政科課程表」の副読カリキュラム（第3学年）に社会学2時間を設けた。翌年、同校は国立北京大学と改称され、嚴復を初代学長に迎えた。嚴復は積極的に外国の社会学を紹介した人物であるから、同大学でもさっそく社会学のカリキュラムが組まれたが、正式に授業が行われたのは、1916年になってからのことである。この年、社会学のクラスが設置され、康玉忠が中国人で初めて社会学の講義をした。

滬江大学は1913年にカリキュラムを設置し、アメリカのポーラン大学から社会学の教師が派遣され、1917年より授業が開始された。なお、1913年11月には、「北京社会実進会」も成立している。

清華大学、燕京大学では、1917年に社会学の講座が置かれた。

また、厦門大学は1921年、歴史社会学系を設置したが、これは中国人自身の設立した大学に社会学科が出来た最初の例である。

上海大学は1922年に社会学科を設置し、瞿秋白を学科主任として、社会主義者による社会学教育が行われた。

この他にも、南京高等師範学校（後に東南大学、第四中山大学、江蘇大学、中央大学と相次いで改称）、復旦大学、及び金陵大学等に社会学のカリキュラムが設けられた。また、社会学科の設置は、1921年以降、急増しており、1930年までに全国で実施されたのは、滬江、燕京、清華、復旦、大夏、中央、光華、金陵、協和、河南、北京師範の11大学である。さらに社会学と歴史学を合わせて1つの学科としたものが2校、政治学と合わせたものが2校、人類学と合わせたものが1校ある。（注16）

ところで、「廣修学校」は辛亥革命前、清朝政府が孫文を首とする革命派による圧力に対して、憲政を実施せざるを得ない立場に立たされた時、孫文思想に対処するためにつくった学校である。これら新型高等学校でも、社会学課程の設置計画があった。先述した京師法政学堂が、そうした動きの先駆けと言える。

しかし、これらの課程、テキスト、その他についての詳細を明らかにすることは難しい。アメリカのキリスト教会が上海に設置したセントジョンズ大学（1879年創設時はセントジョンズ学院、のち1906年に改称）ではバジヨット（Walter Bagehot）の「物理と政治」（Physics and Politics）を教材とした。教師もアメリカ人が多く、例えば、清華大学のディットマー（C. G. Dittmer）、滬江大学のゴールプ（Daniel Kulpll）、ベックリン（H. S. Bucklin）、ディーレイ（J. Q. Dealey）等がいる。

このように1910年代から、中国の各大学では社会学のカリキュラムや社会学科が相次いで設置・開設されるようになったが、以後、種々の挫折に遭遇することも免れなかった。例えば、日本軍閥による中国侵略で、華北、華東、及び華南等の地区の大学は、西の方に移転せざるを得なくなり、一部の社会学科が募集停止や規範縮小を余儀なくされたり、一部の社会学者が専門を変えたりした。また、1920年代から30年代において、共産主義の活動が活発になり、農村革命の思潮が高まって、旧来の中国社会組織に対してかなり大きな影響を与えた。それと同時に、一部の社会学者が日本社会学の影響を受けて、マルクス主義を社会学として教授したため、一般の人々は理解が及ばず、混乱して、社会学に対する疑惑や恐怖心さえ抱くようになった。こうした心理状態は社会大衆の動向を大きく左右すると龍冠海氏は指摘している。（注17）これらは中国社会学の発展にとって相当な挫折であったと言わなければならない。さらに1940年

から48年の間に、社会学教育は一層の困難に出くわすことになる。すなわち、戦争による危害、生活の不安定、設備の貧弱等である。

だが、他方では少なからぬ新しい激励となる事態も生じている。1938年、教育部（文部省）は、統一した大学カリキュラムを公布し、社会学を文・理・法・師範の4学部の社会科学類の共通必修科目の1つとした。また社会学科の教育課程基準を定めたことは、社会学発展の大きな励みとなったはずである。

1940年、中央政府内に社会部が新設され、中国の社会政策の制定や、社会行政の体制の確立、社会奉仕の推進等に当たった。そのほかソーシャル・ワーカーの人材養成においては、各大学の社会学科と直接または間接的に連繋がとられ、また或る社会学科に対する経済援助もあった。このような社会部の賛助の下に、各大学の社会学科の实地研究作業及び学生の卒業後の進路問題も、多くの解決がなされたのである。社会部の新設により、多くの社会学科では、社会行政施設と社会の実情とのタイアップから、ソーシャル・ワーカーの教育課程を増設した。

1944年の秋、教育部は大学課程改訂会議を開催し、社会学科の中に社会行政専修を設置することを特別に許可した。そして「社会行政と福祉」は、社会学科学生の必修科目と規定された。また、社会部設置以前、停止を命ぜられていた中央大学の社会学科も、社会部と中国社会学社の要求に応じて、募集の再開が認められた。

1947年秋までに全国の大学及び独立学部で社会学科を設置するものは計19校あった。すなわち、中央、清華、中山、復旦、雲南、金陵、燕京、滬江、嶺南、華西、東呉、光華、輔仁、震旦、珠海の各大学、及び金陵女子文理、広東省法商・郷村建設、広州法商等の学院である。そのほか、厦門、齊魯の2大学では歴史社会学科併設であり、社会教育学院では社会事業行政学科を設けている。

なお、上記の金陵大学社会学科には、社会福祉行政専修があり、上級ソーシャル・ワーカーの人材を訓練養成している。華西大学には郷村建設学科が設置されているが、これは郷市教育が専らである。

以上、見てきたように、中国社会学の発展期或いは成長期は、大体1928年から1948年までの20年間と言ってよいだろう。この間、社会学教育は前の一時期よりも活発になり、大学や専門学校で社会学科を設置するところも増え、また実質化した。この時期は、中共第6次代表大会の後、全国に新しい農村革命の思潮が起こり、いわゆる中国社会問題の一連の論争を引き起こした時期でもあった。学校系統の社会学も最高頂に達している。この時期の最初は少し混乱があったが、これは上述した社会主義社会学の発展により、中国人は過激主義を宣伝するものだという誤解が生じたことや、社会学は空洞で実質的なものがないという考えなどの影響である

と龍冠海氏は述べている。(注18)

だが、社会学は一種の科学と言われている。そして社会学者も一科学者と言ってよい。すなわち冷静な頭脳で物事を観察し、或いは調査・研究・分析に従事すべきである。ところで社会主義は社会学の中の社会思想の一種でもある。しかし、社会思想はあくまでも社会学の中の一課程であり、社会現象を体系的・客観的に分析する科学なのである。応用社会学の面では、社会を改良する作業にも涉っているが、学問の理論としての研究上の作業を目的とすることがその基本であり、それは社会を良くするような機能もあることを否定することはできない。

七

社会学の担当教員数と受講学生数については、統計がないので正確なところはわからないが、その設置状況から判断すると、かなりの数に上ると考えられる。

中国社会学発展第4期の後半において、社会学科もしくは社会学科目を設置する学校が増加し、その教員と学生数も必然的に増えた。社会学科がなくても、科目が設置されたのは、例えば、政治、北京、四川、南開、貴州、セントジョーンズ、武漢、浙江等の各大学、及び東方語言専科学校などである。(注19)

1947年12月の調査報告では、社会学教授、助教授、及び講師は計143人であるが、そのうち12人がアメリカ出身で、また残りの131人中、87.7%を占める115人が外国に留学した者であった。その留学先も、アメリカが最も多く、78人、続いてフランス13人、日本10人、イギリス9人、ドイツ4人、ベルギー1人となっている。このように中国社会学者に対するアメリカ留学の影響はきわめて大きい。(注20)

社会学専攻学生数が最も多かったのは、社会部成立後、1948年までの発展期である。中央大学の1937年から48年前半期の報告書によると、社会学科の毎年の卒業生は1947年までに計153人、そのうち92人（およそ全体の5分の3）が1945年から47年までの2年間に卒業した。同校の年度卒業者は100人余りだが、1947年の1年生で社会学を専攻した者は115人あり、これからも学生数がかかなり増えていることがわかる。

また、清華大学社会学科の例では、1947年の専攻者は81人で、戦前の3倍以上になっている。金陵女子文理学院社会学科は、1936年から1946年までの10年間に、専攻者が30人から80人前後に増えた。龍冠海氏の推計によると、1947年、全国の大学の社会学専攻学生総数は、およそ1500人前後であると言う。(注21)

なお、社会学科卒業生の就職についても、はっきりと把握することは難しい。ただ、当時の

社会文化環境から推察すれば、出国研修した者は少ないであろう。大学の助教授になる者もあるが、大多数は政府機関の仕事に就いている。これは学問をすれば仕官の途に就くという中国の伝統的パターン、すなわち学歴偏重の志向によるものと言えよう。

当時の社会情勢としては、経済社会構造においては致し方がないことである。なぜならば、経済発展の遅れから、就職する職場が少ない等、多くの困難を抱えているからである。また社会学研究にとっては、経費や技術の面における困難がある。社会学の研究対象は、自然科学が物体を対象とするのと違って、社会の現象であるから、テキストの指図のままにはいかない。況してやこれまで中国の社会学者の多くは熟練した調査研究の技術に欠けていることから、アンケートの質問設定によって、調査結果に大きな違いがみられることも考えられる。

八

さて、社会学の研究団体・組織について、下記の通りまとめてみた。

言うまでもなく、いかなる学問の発展にも、その研究団体と組織は欠くことのできないものである。社会学も当然その例外ではない。社会学者の組織する団体は、中国社会学の地位 (status) と役割 (role) を判断する一指数と言える。なぜならば、このような団体は常に社会学の発展と密接な関係があり、およそその団体の組織と範囲が健全であればあるほど、その地位と役割も必ずやより重要なものとなるからである。社会学が発展すれば、社会学団体も発展し、それはまた社会学の発展を促進し、その地位を高め、その職務を強化していくのである。

中国社会学発展の初期、1913年11月に北京で「北京社会実進会」が設立された。これは社会福祉事業及び社会奉仕のための、青年による最初の組織である。

1922年2月、余天休は北京で「中国社会学会」を発足させたが、当時の参加者は少なく、成立後、間もなく立ち消えになった。

1923年、晏陽初は北京で「中華華民教育促進会」の総会を開催し、全国を華南、華北、華東、華西、華中、西北、東北の7大地区に分けて、平民教育の推行に当たった。彼は80%の人口が農村にあることから、農村を重視し、調査、研究、実験、示範、推行の段階を決めて、実際的な社会学研究に努めた。

1924年、「中華教育文化基金董事会」が北京で成立し、20数種の調査研究レポートが提出された。

そして1928年、上海と南京の社会学教授、例えば、孫本文、呉景超、潘光旦等は、国内の社会学研究者が日に日に増えてきたことに鑑み、「東南社会学会」を発足し、組織化した。これ

は東南各省の社会学者と連絡し合い、共同研究を目的とするものである。翌年の冬、北京各大学の社会学教授、例えば、陶孟和、許仕廉、陳達等は、東南社会学会の責任者と相談し、この学会を拡大して「中国社会学社」と改組し、全国の社会学者の共同研究を進める上での連繋の拠点とした。それは1930年に上海で成立大会が開催され、同年11月には、法の規定によって、南京市教育局に批准登記を申請した。その後、教育局が批准の手続を行い、1931年4月、南京市の国民党支部に申請し、許可証書が遅れて発行された。ここにおいて、この学会は正式な合法的学術団体となり、その主旨は「社会学原理、社会問題、及び社会行政の研究」と謳われている。(注22)

この団体の成立は、中国社会学発展史上、きわめて有意義にして重要なものであった。それは中国の社会学研究者にとって、1つの精神的団結の代表組織であり、同時に中国社会学の発展にとって、1つの大きな助成力ともなったのである。その主要な活動は、毎年大会を催し、会員が論文を読み、研究成果を発表し、中国社会学をいかに促進するかを討論し合う。また、社会学関係の学術雑誌も出版され、例えば季刊誌「社会学刊」などがそれである。

中国社会学社の第1回大会(すなわち成立大会)は、1930年2月、上海にて開催され、論文10数篇の発表のほか、蔡元培氏の「社会学と民族学の関係」の講演が行われた。

第2回大会は1931年に南京で開かれた。この時、発表された論文20数篇は、人口問題が討論の中心となり、また当時、南京に講義に来ていたアメリカの人口学者タンスーソン氏の「大都市と人類の福祉」という講演があった。その後、これらの論文は年刊に編集され、「中国人口問題」と題して、上海世界書局から出版された。

第3回大会は北京で開かれ、論文20数篇が発表された。(年月日は不明)

第4回大会は1935年2月、上海で開かれ、論文20数篇が発表された。

第5回大会は1936年1月、南京で開かれ、論文10数篇が発表された。

第6回大会は1937年1月、上海で開かれ、論文10数篇が発表された。(注23)

これ以後、抗日戦争の影響で、会員が分散し、交通も困難となったため、あらゆる活動は停止せざるを得なかった。しかし、1943年には再び活動を始め、重慶、成都、昆明の3地区で、同時に第7回大会が開かれ、「戦後の社会建設」を討論の主なテーマとした。

復員後、1947年には、広州、南京、北京、成都の4地区で、同時に第8回大会が開かれ、「中国社会学の今後の発展のとりべき道」を共通テーマとした。

翌年10月1・2両日にも、上記と同じ4地区で、同時に第9回大会が開かれ、多数の論文が発表され、「20年来の社会学」を共通テーマとした。これは大陸と台湾の二つの政権分裂以前の、中国社会学社最後の活動となった。当学社の会員数は正確には調べることができないが、

ただ1943年1月に132人、1947年9月に160人あったことがわかっている。会員は各大学の学者の他には、中央及び各省市政庁や社会研究機関に勤務する者等であった。(注24)

そのほかの団体としては、1931年から1935年、梁漱溟が山東鄒平で「山東郷村建設研究院」を設立した。彼は「中国の建設は必ず郷村建設から始まるべきであり、これを以て工業への道にリードしていくべきである」という理論を実践して活躍した。また、1939年から1946年、陳達教授等による「清華大学国情一斉調査研究所」が、雲南昆明郊外の貢県にて成立し、人口の一斉調査に大きく寄与している。さらに「中央研究院社会科学研究所」(所長陳翰笙、北京大学教授、アメリカ留学で博士学位を取得)、「雲南大学社会学研究室」(文学院院长呉文藻)、「華西大学邊疆研究所」(1942年に大学設立、所長林耀華)等の機構による社会調査研究も盛んに行われた。

九

ここで中国社会学の著述による研究成果を考察してみることにする。

中国で出版された社会学書籍を分析すれば、およそ次のようになる。すなわち、すでにふれてきた1891年から1911年の胚胎期、中国社会学の覚醒から受容の時期においては、ほとんどが翻訳書であった。

第2段階、すなわち1912年の辛亥革命成功による中華民国成立後、1918年までの社会学の萌芽期においては、翻訳と自著が約半分ずつを占めていた。翻訳書の中でも、日本の岸本能武太の「社会学」の書名をそのまま訳したことから、以後、中国でも社会学という語彙が使われるようになったのは、先に述べた通りである。1915年、陶孟和・梁宇皋共著の「中国農村と都市生活」は、中国の社会学著作の第1冊であり、1918年、陳長蘅著「中国人口論」(商務印書局)では、初めて人口論が展開された。

中国社会学発展の第3段階、すなわち1919年の五四運動から1927年の大革命失敗までの時期においては、社会学著作の翻訳ならびに中国人自身による著述も大いに増加した。この時期の重要な翻訳書には、遠藤隆吉著・賈公寿訳「近代社会学」(1920年)、エールウ著・呉旭初訳「黎明の群像心理」(1920年)、エルウッド(Charles Ellwood)著・趙作雄訳「社会学及び現代社会問題」(1920年)、キャウルロー著・陶孟和、沈怡、梁綸才共訳「社会進化史」(1924年)等があり、また1923年、世界書局からE. C. Heyesの「社会学研究」、1925年、商務印書館からH. Coxの「人口問題」が出版された。中国人自身の編著では、易家鉞の「社会学史要」及び「西洋家族制度研究」(ともに1921年)、常乃真の「社会学要旨」(英・日の社会学類書を参

考に編集したもの、中華書局、1924年）、蔡和森の「社会進化史」（モーガンの「古代社会」を参考にした著作、民智書局、1924年）、葛学溥の「華南農村生活」（滬江大学教授葛学溥の指導による潮州鳳凰村の調査報告、1925年、アメリカで出版）、李達の「現代社会学」（マルクス主義の観点からの著作、1926年）、馬俊の「中国労働問題」（民智書局、1927年）等が重要である。

第4段階、すなわち1928年から1948年の間には、社会主義陣営も加わった中国社会問題に関する論争が起こり、学校における社会学も体系化された。そうした中で、1930年、米籍教授ラーカイ氏による「中農場経済」が英文で出版された。

1930年代に出版された翻訳名著には、デュルケム著・許德珩訳「社会学方法論」、シューロリア著・陶孟和等訳「社会近代史」、モーガン著・楊東蓀訳「古代社会」、マクトコー著・劉延陵訳「社会心理学緒論」、アイルウ著・金本基訳「社会心理学」等がある。とりわけ、1933年、世界書局から出版されたソローキン（P. A. Sorokin）著・鍾兆麟訳「社会変動論」は、その方面の研究に大きく貢献した。そのほか、ローウィの「初民社会」、ソローキンの「当代社会学説」、パウゴダーの「社会思想史」、ウォーバンの「社会変遷」、デュルケムの「社会分工論」、及びウェーバー夫妻の「社会研究法」等が出版されている。

中国人自身の著作で比較的重要と思われるものには、朱亦松の「社会学原理」、孫本文の「社会学大綱」二大冊（主編）、「社会学原理」、李景漢の「北京郊外の郷村家庭」、「定県社会概況調査」、潘光旦の「中国の家族問題」、陳達の「中国労働問題」、「人口問題」、「南洋華僑と閩粵社会」、陶孟和の「北京の生活費の分析」、許仕廉の「人口綱要」、柯象峯の「中国貧窮問題」等がある。

この時期の後半には、社会行政事業発展の影響をまともに受けたことによって、出版物にも1つのはっきりした新しい傾向が見られる。すなわち、ソーシャル・ワーカーと行政の著作が増えたことである。例えば、孫本文等の編集による「社会行政概論」は、1942年社会部主催の第1次全国社会行政会議において、社会部社会研究室主任の張鴻鈞が社会学界の人々に依頼し、集まった論文計30篇を、1944年に孫本文等の名義で刊行したものである。また、柯象峯の「社会救済」は、社会部が成都の各大学の社会学とソーシャル・ワーカーの教授たちを招いて、共同で会を主催し、社会救済問題を検討した結果を、後に柯氏が編集した。そのほか、言心哲の「現代社会事業」等も挙げられよう。

以上見てきたように、中国で出版された社会学関係の著作は、最初の段階では外国の書物の翻訳がきわめて多かった。その後、第2、3期にも翻訳は継続されているが、同時に中国人自身による著作も次第に多くなって来る。そして、その大部分が社会問題及び実際の研究に積極的に取り組むものである。

さて、これらの著作の出版状況はどうなっているのでしょうか。1948年の孫本文「当代中国社会学」の付録に「中国社会学重要文献分類簡表」があるが、この表の統計によると、中国でこれ以前の40余年内に出版された社会学関係の主要書籍は、全部で312種となっている。この数字は必ずしも正確とは言い難い。もし過去数十年に中国大陸で発刊されたあらゆる社会学の書籍を列記すれば、必ずやこの数字を超えるだろう。例えば、1935年11月、生活書店出版の「全国総書目」から社会学に関するものを計算すると、740種類にも上るのである。(注25) このうち翻訳は322種、中国人自身の編著は418種であった。もし1935年から1948年までの時期に出版されたものを含めれば、恐らく1,000種を下らないはずである。しかし、これらの書籍の多くはすでに散逸しているので、その考証は難しい。また、純粹には社会学に列することができないものも少なくないと言う人もあろう。そのため、ここでは孫本文の書に列記されたものを代表としても、恐らくそれほど大きく差異はないであろう。

龍冠海は翻訳及び中国人自身による社会学書籍計316種の出版年次を、次のようにまとめている。(注26)

第4段階までにおける社会学訳著数一覧表

出版年次	訳書	自作	計
民国建国以前	8	0	8
1912-1921年	7	7	14
1922-1931年	25	77	102
1932-1941年	28	79	107
1942-1948年	7	59	66
未確定年次	6	13	19
総計	81	235	316

上記の表によると、1922年から31年までと1932年から41年までに出版されたものが、それぞれおおよそ総数の3分の1を占めていることがわかる。これはそれ以前の4倍以上である。また翻訳と自作の比率は、ほぼ1対3であり、中国人自身の著作が飛躍的に増えている。以後もこの傾向が続き、1942年以降の訳書と自作の比率の差はさらに大きい。なお、上記316種のうち、ソーシャル・ワーカーによるものは25点あり、その5分の4に当たる20点が1942年から48年までの数年間に出版されたものである。

第5段階の1949年以降の中国社会学の形成については次号で述べることにする。ただ、1949年、北京で中華人民共和国という中共政権が成立し、一部の社会学者は国民政府と共に台湾に

撤退した。その中でも、龍冠海は1950年に渡台し、台湾大学に社会学系が設立されてからは、その主任教授となり、台湾における中国社会学界の指導的地位にあった。彼は「社会学刊」の編集を一手に担ってきた碩学であり、この時期の主な著作に「社会学講話」、「社会学概要」等がある。(注27) また、1928年、ドイツから帰国した黄文山は「当代社会学説」、「ドイツ系統の社会学」等の著書を世に出し、ソローキンやヘイア等の社会学名著を翻訳した。戦前から来日した台湾出身の社会学者呉主恵博士は、現在もなおアジア文化総合研究所の理事をつとめており、総合研究誌「アジア文化」にも健筆を奮っている。彼の「漢民族の研究」(1948年)、「華僑本質の分析」、「民族社会学」等は、中国人学者の間でも高く評価され、1つの分野を開拓した。(注28) 近年台湾社会学の発展についても、第5段階、すなわち1949年以降のところまで詳述する。中国大陸が中共政権に取って替わられてからの報道によると(注29)、清華、燕京、輔仁、上海、復旦、南京、及び金陵等各大学には依然社会学科が置かれており、その教育目標では、理論と實際が生まれ、理論は必ず實際に符合しなければならないとある。しかし社会学科の理論教科は取り消され、代わりに唯物主義社会学、政治経済学、弁証法、及び帝国主義の研究が課せられた。また、イギリスの社会学者 M. フリードマンのレポートによれば、1947年には全中国の社会学者による中国社会学会設立の動きがあった。そして全中国の各大学に社会学科を設置するよう呼びかけることをもくろんだとの報道がある。(注30)

十

社会学者の職務で、教育と翻訳・著述の他にも、科学の社会学の立場から言えば、理論と實際の面において最も価値があると思われるのは、とりわけて社会の实地調査と研究である。

中国の社会調査は、その発展の初期においてすでに始められた。それは外国による中国社会の研究や欧米の社会調査等の影響を受けている。1914年から翌年にかけて、北京の人力車引きの調査が行われた。これは北京社会実進会によるもので、この調査に参加した陶孟和は、これによって中国の家庭生活の实情が明らかにされ、多くの覚悟と救済方法について考えさせられたと後にその思い出を書いている。(注31) 人力車引きとは、人間が牛や馬として働く一種の残酷な職業である。当時の中国には、近代的運輸道具が欠けており、一般の市民は人力車を交通手段とした。調査の対象としたのは、302人の人力車引きの生活の实情であるが、人力車引きが多いということは、大変厳しい社会問題でもあった。社会学者がそれを調査の手始めとしたのは、その調査が比較的容易であったからにはほかならない。

1917年、清華学校教授デイトーモーは学生を指導して、北京の西郊で195家族の生活費用の

実情を調査した。このうち100家族が漢民族、95家族が満州族であるが、満州族ではかつて食糧を貰って生活できた。

1918年から19年に北京のアメリカ籍宣教師ガンベル (S. D. Gamble) は、燕京大学社会学教授のブルジズ (J. S. Burgess) の指導の下、北京で統計方法や資料の収集・整理による社会調査を実施した。これは中国における都市社会調査の始まりと言えよう。その調査結果は「北京—1つの社会調査」と題して、英文の書物にまとめられたが、これはアメリカの1914年のスプリングフィールドでの調査に倣ったものである。

同年、滬江大学社会学教授クールプ (D. Kulp II) もまた学生を引き連れて、広東の潮州鳳凰村で実地研究をした。調査の内容は、村の地勢、人口、衛生、種族、経済、行政、風俗、クラブ、社団、教育、美術、娯楽、宗教等の実情である。その研究成果は、1925年に「華南郷村生活」と題し、英文で出版された。(注32)

発展期の後半には、中国人自身による社会調査研究も漸次増え始めた。例えば、1923年、白克令教授の指導の下に、滬江大学社会学調査班が、上海近郊の沈家行農村調査を行い、また中国北部でも、ブラーデル (T. C. Blaisdell)、朱積権等による絨毯製造労働者の生活調査が行われた。1923年から24年にかけて、金陵大学農科教授ブーク (J. L. Buck) の指導の下、学生たちが安徽・蕪湖の耕田実情の調査、河北・塩山県150耕田の経済社会調査を行った。1924年から25年まで、甘博教授と孟天培、李景漢氏等は、北京で1,000人の人力車引き、1,200ヶ所のレンタカー工場、100人のドライバーの家庭を調査した。1926年、孟天培と甘博は、1900年から1924年までの25年間の物価、賃金、及び生活費の変化の実情等、体系的な調査をした。同年、陳達の指導の下に、北京経済討論処は北京の小売物価を調査した。1926年から27年まで、甘博、張秉衡、李景漢等は、北京の税金、店舗、労働者の組合、賃金等の実情を調査し、労働者の生活実態をかなり正確に把握した。同年、陶孟和は家庭記帳法にて北京の手工業労働者48家族と小学校教師12家族の家庭生活費について、それぞれ6ヶ月間と1ヶ月間の調査をした。なお、1925年に社会研究所設立準備委員会、1926年7月1日に中華教育文化基金理事会社会調査部が設立されたことにより、社会調査事業の発展は大いに促進された。2年後、社会調査部は、国立中央研究院社会研究所と合併している。

次に、1920年代から30年代における比較的著名な調査結果報告は次の通りである。すなわち、李景漢の「北京郊外の郷村家庭」(1929年)、南京金陵大学教授ブーク (J. L. Buck) の「中国農家の経済」(1930年)、陶孟和の「北京生活費の分析」(1930年)、燕京大学社会学科の「清河镇調査」(1930年、英文の本題は“Ching Ho, A Sociological Survey”)、李景漢の「社会調査方法」及び「定県社会概況調査」(1933年)、凌純声の「松花江下流の赫哲族」(1933年)、喬啓

明の「江寧県淳化鎮郷村社会の研究」(1934年)、言心哲の「農村家庭調査」(1935年)、柯象峯の「中国の貧困問題」(1935年)、陳達の「南洋華僑と閩粵社会」(1938年)等が挙げられる。

この中で特に注目すべきものとしては、李景漢の1933年の調査報告がある。これは1931年に定県で行われた土地分配と農作物の種類に関する調査の報告であるが、ここで彼は個案調査、サンプリング調査、間隔調査、特殊サンプリング調査、層次調査等の多面的調査方法を実施した。また、1935年の柯象峯の報告(正中書局)では、中国の貧困の予防と問題点の根本的解決について取り上げている。さらに1938年の陳達氏等の報告(商務印書館)は、1934年9月から35年4月まで、太平洋学会の依頼により行われた調査に基づくものであり、福建、広東地区の華僑出身地の海外移民の影響に対して大きな成果があった。

抗日戦争の開始による局勢の転変に伴い、社会学者はほとんど政府と一緒に中国の西部に移った。このため、調査研究の作業は少なからぬ影響を受けたが、新たに若干の発展もあった。例えば、辺境社会の研究は其中で最も意義あるものである。

1940年代の比較的重要な調査報告には、次のようなものが挙げられる。呉澤霖と陳国鈞の「鑪山黒苗の生活」(1940年)、主計處統計局の「四川省選県戸口普查総報告」(1943年)、史国衡の「昆廠労働者」(1943年)、費孝通の「禄村農田」(1943年)、徐益棠の「雷波小涼山の鑛民」(1944年)、陳達等の「雲南省戸籍示範工作報告」(1944年)、陳序経の「蛋民の研究」(1947年)。なお、毛沢東をその代表とする中国社会主义支配下における調査活動は、資料の不備で考察することが出来なかった。これについては次号の第5段階・改革期にて考察したい。

以上述べてきた調査・研究の成果が、まさしく中国社会の或る方面の現象及び問題に対して、より切実な理解を得られたことは、かなり評価してよいものである。とりわけ形成期に到るまでの間、中国社会学者の中には、さらに現代社会学の人類学の観点と方法をも若干応用して研究しているところが見られ、その成果の幾つかはこれまでの成果よりもさらに大きな価値のあるものとされている。

なお中国社会主义下における社会学者の研究成果といわれている「解放区社会調査」については、①社会学の研究、とりわけ社会調査の実施による科学的世界観と方法論が得られたこと、②社会調査研究についての理論が確立できたこと、③社会調査の具体的方法が習得できたことは評価してよいものである。

十一

ところで、実地調査作業への参加の実態についても、ここで少し触れてみる。

この実地作業とは、社会学者が政府の政策制訂及び行政措置に参加または協力したことを指して言うのである。特に抗日戦争期間の社会部成立後が顕著と言えよう。これ以前にも、少数の社会学者は、この種の作業に参加・協力しており、例えば定県と鄒平における作業、農村実験の建設、国民政府の推行による経済建設等があった。しかし、社会部の成立後は、政府の抗日戦略上の西部移転に伴って、社会学者はほとんどと言ってよいほど、直接または間接に、或いは多かれ少なかれ、政府の招きに応じて、各種の社会行政と設計の作業に参加した。彼らは社会部の設計委員として招聘され、社会部全国行政会議にも多く招かれて意見を求められた。中国が1945年制定した4大社会政策（すなわち、民族保育政策、農民政策、労働政策、及び社会安全政策）の多くは、社会学者の提言乃至参加等の貢献によるものである。このほかにも、社会救済法の制定、抗日戦争の後期に政府が四川、雲南で行った全国戸籍一斉調査等に、社会学者が貢献している。

とにかく、実地作業方面から見た場合、社会学形成の後期は、その全発展過程において、最も活躍の成果が上がった時期と言えよう。

なお、大学における系統的な社会調査や研究方法には、1930年代の後期になされた新しい試みと言われている「コミュニティ研究」がある。これ以前、中国の社会学界で言われていたのは、「社会調査」であって「社会学調査」ではない。社会調査とはこれまで言われているところの社会調査と同じであるが、中国で言う社会学調査とは、費孝通によれば社会学専門家の学術活動を目的とする。そしてそこから人類の共同生活の原理原則を発展させることであり、それにはコミュニティの奥深く入り込み、社会変動の過程を研究することでもある。

十二

中国における社会学関係の雑誌が初めて見られるのは、1913年11月の「北京社会実進会」の設立によって発行された旬刊の「新社会」である。続いて1915年の「新青年」にも李大釗の社会学論が掲載されている。

そして中国人が社会学方面において、初めて自分自身によって創作と研究するようになった時期、すなわち1923年に余天休が華北で隔月刊の「社会学雑誌」を発行した。これは時々中断しながらも、全部で3巻の3号までを出し、1930年前後に完全に停刊された。次に、1927年、燕京大学社会学科の編集発行による年刊の「社会学界」がある。これは同大学の中国社会学界における学術水準を示すものであり、それなりの地位を確立したが、10巻までで停刊になった。さらに1929年、東南社会学会の主宰で季刊の「社会学刊」が創刊された。これは第2巻の第1

期から、中国社会学社が編集の責任者で、当学社の代表刊行物となったが、抗日戦争の激化により、第5巻第3期で停刊した。

上述の3刊行物が比較的長期にわたった、まともな雑誌であるが、これ以外にも、例えば「歴史社会文摘」(厦門大学歴史社会学科主編)、「社会研究」(国立中山大学社会学科刊行)、「社会学訊」(中国社会学社広東支局出版)、及び「社会研究」(南京中央日報の副刊に1947年9月30日まで計25期掲載)等がある。これらの刊行物は社会学知識を提唱し伝播する上で、頗る大きな貢献をしたと言える。以上列記した刊行物の中では、「社会学刊」と「社会学界」が中国の学術面において比較的高い地位にあると言ってよい。(注33) 出版物は学問の提唱・高揚・研究者相互の連繋等に有効な手段であるが、およそ出版物が発行されるには、学問自身の発展、研究者の成果、及び読者の獲得の3点がある程度の段階まで到達する必要がある。従って、一国の社会学の出版物から、その発展、地位、職務、問題点といった一般概況を判断することができるのである。

注

- 1) 尾形裕康「西洋教育移入の方途」(野間教育研究所紀要第19集), 講談社, 1961年, 5頁
- 2) 拙著『儒家思想と教育』成文堂, 1991年, 295-299頁参照
- 3) 于光遠「上海市社会学会成立大会における講話」1979年9月20日(復旦大学分校社会学系編『社会学文選』浙江人民出版社)1981年1月版
- 4) 孫本文『当代中国社会学』勝利出版公司, 1948年
- 5) 許仕廉「中国社会学運動の目標」(『社会学刊』2巻第2号)1930年
- 6) 呉主恵「中国社会学序説」(『東洋大学社会学部紀要』第8号)51頁
- 7) 謝徵孚『国父思想と社会学』正中書局, 1965年。謝康『社会学から国父の社会学思想を見る』正中書局, 1974年
- 8) 李劍華「社会学史綱」(孫本文編『社会学大綱』世界書局)1931年
- 9) 楊堃「社会大綱」北京大学法学院講義, 1941-42年
- 10) 韓明漢『中国社会学史』天津人民出版社, 1987年, 12頁
- 11) 齊藤正二『日本社会学成立史の研究』福村出版, 1976年, 20頁
- 12) 龍冠海『人文主義社会学と中国正統社会思想』1-11頁参照
- 13) B. I. シュウォルツ著・平野健一郎訳『中国の近代化と知識人—巖復と西洋—』東京大学出版会, 210-234頁
- 14) 福武直「中国社会学の伝統についての紹介」毎日新聞, 1979年4月9日夕刊参照
- 15) 孫本文『当代中国社会学』17-18頁
- 16) 龍冠海「中国社会学の回顧と展望」(月刊『新社会』第5巻第2号), 1953年
- 17) 龍冠海「社会学の中国における地位と役割」(『社会学と社会意識』), 70頁
- 18) 同注17), 69-70頁

鍾 清 漢

- 19) 『中国社会学社第8回大会特刊』第5号, 1947年
- 20) 孫本文『当代中国社会学』付録「中国大学社会学教授姓氏録」を参照して作成。
- 21) 同龍冠海前掲書
- 22) 「中国社会学社概況」(『社会研究』第25号) 中央日報, 1947年7月30日
- 23) 同上
- 24) 同上
- 25) 龍冠海「社会学の中国における地位と役割」73頁
- 26) 同上
- 27) 同上
- 28) 吳主恵氏の民族社会学は、とりわけ『漢民族社会の研究』(1935年)等に見られるように、華僑の研究者としても高く評価されている。(日本社会学会編『社会学』有斐閣, 1939年, 324頁参照)
- 29) American Journal of Sociology, July, 1951
- 30) Maurice Freedman "Sociology in China: A Brief Survey" The China Quarterly, No. 10 (April-June, 1962)
- 31) 楊雅彬『中国社会学史』山東人民出版社, 1987年, 95-102頁
- 32) 同前掲書, 34頁
- 33) 龍冠海『社会学と社会意識』国立台湾大学, 1974年, 79頁